渇いた蜃気楼

作

田辺剛

［登場人物］船田亮、船田真澄、鳥飼雄二

1

日本のとある地方都市。内陸の街で、三方向を山に囲まれ、残りの一方向に平野が広がる。市内にはＪＲの駅が二つあって辛うじて快速が止まる駅と鈍行のみが止まる駅。特にこれといった産業もないので年々人口は減っている。市の中央に流れる大きな川が釣りの愛好家に有名なくらいだ。

船田亮と真澄が住むアパートは木造二階建ての古いものだが高台にあって窓から市内を一望できる。舞台は彼らが住む２ＤＫの部屋。アパート二階の最奥にある。

酷暑の夏。少雨でダムは干上がり、川も向こう岸に渡れるほどにその水位は低くなった。市内では給水制限が始まり、夕方から夜までの五時間しか水が出なくなった。しかも船田たちが住むアパートは高台にあるので給水時間になっても水圧低下で水が出ず、毎日やってくる給水車に頼らざるをえないことになっている。

午後。扇風機が回る部屋。微かに鳴る風鈴の音。窓が開いているので蝉の音も聞こえる。部屋には椅子に座る真澄が一人、運動をしたせいで汗をかき大きな呼吸をしている。水が入ったポリタンクを持った亮が現れる。亮も呼吸が荒い。

亮　……盗まれた。
真澄　……。
亮　やられた。
真澄　え。
亮　自転車。信じられん。
真澄　自転車？
亮　自転車。
真澄　盗まれた？
亮　（つぶやいて）全然分からん。
真澄　どこで。
亮　盗むってどうして……
真澄　え。
亮　自転車。

沈黙。

真澄　どこで。
亮　え。
真澄　自転車。
亮　スーパー。水もらうのに並んでて……十分十五分だぞ、鍵かけてなかったんだけど、
真澄　かけなかったの。
亮　かけないよ。
真澄　かけるでしょ。
亮　いやだって……そんなちょっとのあいだに。
真澄　鍵ついてたら持っていくよ。
亮　いやぁー……いやぁー、え？　そうか？　持っていくか？　普通持っていかないだろ。だって、
真澄　持っていくって。鍵ついたままなんでしょ。
亮　いやぁー……たくさん自転車があって。だぞ？　スーパー。たまたまその中の一台に鍵がか

かっていないものがあったとして、さらに自転車を盗んでやろうと虎視眈々と物色してる奴がたまたまいて、

真澄　「コシタンタン」？……。

亮　そうだろう。狙ってるんだろ？　そういう奴って。

真澄　どういう意味？「虎視眈々」。

亮　狙ってるんだよ。

真澄　ああ……

亮　で、いっぱい自転車がある中で、たまたま鍵がかかっていない自転車がある。あって、さらに自転車を狙っている奴がたまたまいて。

真澄　（つぶやいて）「虎視眈々」

亮　そいつがたまたまその自転車を見つけてしまう。それがたまたま持ち主に見つからないうちに盗まれていく。あるか、そんな確率。ないよっ！

真澄　けど盗まれたんでしょ。

亮　……。

真澄　持っていかれたんでしょ。その低い確率が見事当たって。

亮　あんな真っ赤な自転車、盗めないだろ目立つのに。ふつう。

真澄　関係ない。

亮　なんで。

真澄　堂々と持っていくから。

亮　は。

真澄　盗むときはコソコソしない。自分のモノですって顔して、いやそんな顔すらしないで、ごく普通に。何気なく。スーッと。だから見られても気にしない。気にしてたらバレちゃう。

亮　だって真っ赤だよ。

真澄　赤だろうが黄色だろうが。

亮　えー。

真澄　鍵がついてるならなおさら。

亮　俺、だって自転車に鍵かけないよ、すぐ戻ってくる時なんていちいち。

真澄　え、そうなの？

亮　そうだよ。

真澄　昔から？

亮　昔は……かけてたけど。

真澄　ほら。

亮　けどここに来てから。だってこんな静かな町……よっぽど狙われてるとかじゃないと、盗られるなんてさ。そりゃ十万二十万するような高級自転車？　だったら別だけど。だってイオンで買った……あれいくらくらい？

真澄　一万円？

亮　一万？……一万か。それは……ちょっとあれだな……。

真澄　一万円裸で置いてるのと同じ。

亮　だって現金じゃないだろ。

真澄　けど盗まれたんでしょ。

亮　こんな田舎で？　そんな人いる？

真澄　自転車くらい「盗む」って感覚もないんだよ、そういう人は。ちょっと借りるつもりで。

亮　じゃあ返すわけ？

真澄　意外と。かもしんない。

亮　元の場所に？
真澄　そうそう。
亮　じゃあ貸してくれって言えばいいじゃん。
真澄　言うわけないでしょ。
亮　なんで。
真澄　盗むんだから。
亮　だって借り……めちゃくちゃだわ、そんなの。

亮はポリタンクを置いて出て行った。
真澄の操作でテレビからは映像と音楽が流れ始める。ダイエットのためのダンスＤＶＤだ。
真澄はテレビの前で構える。
少しして亮がまた別のポリタンクを持って戻ってくる。

真澄　ドア。
亮　え。
真澄　開けといて。暑いから。

亮は真澄に従って玄関のドアを開ける。部屋へ戻ると真澄の前にあった扇風機を自分のところへ持っていった。

真澄　扇風機。
亮　え。
真澄　暑い。
亮　大丈夫なの？
真澄　え。
亮　体、そんなに動いて。
真澄　大丈夫だよ、別に。
亮　ふーん。
真澄　だから風。
亮　よくないんじゃないの。
真澄　……。
亮　それにさ
真澄　扇風機！

亮は扇風機を真澄に向けるが首振りのスイッチを押す。

亮　太ってないよ。
真澄　……。
亮　全然、大丈夫だと思うよ。
真澄　……。
亮　こんな真夏にわざわざ……

亮は扇風機の首振りを自分を向いたところで止めた。

真澄　ちょっと、風。

亮　ねえ。
真澄　なに。
亮　なんでダイエットしてるの？
真澄　風。
亮　（扇風機を向けて）太ってるって思ってるの？
真澄　運動。
亮　運動？
真澄　そう。
亮　ダイエットじゃなくて？
真澄　亮くんも、ほれ。
亮　俺？
真澄　動かないでしょ。
亮　いいよ俺は。
真澄　風、わたしだけに頂戴。
亮　俺も暑いんだけど。ポリタンク持ってさ、ずっと歩いて。歩くっていうか、坂を上って。自転車ないから。盗まれたから。ひたすら手作業だよ。手作業？　二つも持ってね、くねくね曲がる坂道をね。ビビったよ俺は。スーパーの自転車がある……駐輪場見て、はじめあれって思って。見過ごすはずないのに、真っ赤だから。移動させられたかなって。けど移動っつったって、一目見ればわかるし。無いなあと思って、ウロウロして駐輪場。行ったり来たり。あれ無いぞ。え？　ウロウロ駐輪場。行ったり来たり。あれ無い。あれ？　ウロウロウロウロ。無い。あれ？　ゲゲッ無い無い。えーっみたいな。
真澄　……。
亮　二つも持って、ポリタンク。手ビリビリ太ももブルブルだわ。
真澄　……。
亮　立派な運動だよ。
真澄　……。
亮　これ……なんでエロいの。
真澄　は。
亮　（テレビを差して）動きがほら。
真澄　エロくないよ。
亮　エロいよ。
真澄　どこがエロいの。
亮　全体的に。
真澄　亮くんだけだよそんなこと言うの。
亮　んなことないだろ、だって……ほら。
真澄　……。
亮　アメリカ人っていうのは、なんでいつもこうなんかね。
真澄　……。
亮　ムチムチしてる。
真澄　……。
亮　ムチムチ。
真澄　……。
亮　アメリカ人？　これ。
真澄　ちょっとうるさいんだけど。
亮　ああ、すみません。

真澄　……。
亮　アマゾンで買ったの？
真澄　……。
亮　え。ギフトカード使ったの。
真澄　使った。
亮　これ？
真澄　好きにしたらいいじゃんって言ったでしょ。
亮　いや言ったけど……

踊る真澄が亮にぶつかる。

亮　イタイイタイ！
真澄　ちょっと近いからっ。
亮　無理だろ、こんな狭い部屋でそもそも。
真澄　仕事探してきたら？
亮　（ニヤニヤして）まあそうだけど。

またぶつかりそうになる。

真澄　……。
亮　（ヘラヘラと笑って）近いよ。
真澄　……。
亮　（笑って）近すぎるだろ。
真澄　……。
亮　（笑って）暑いよ。
真澄　……。
亮　（ぶつかりそうになるのをおどけて）わぁー、やめてくれぇー。
真澄　じゃあ向こうに行ってよ。
亮　ええっ？

真澄はＤＶＤを止めて台所へ。亮は床に仰向けに。真澄は水を飲みながら離れたところから亮を見ていた。

亮　アメリカ行く？
真澄　え。
亮　アメリカ。
真澄　なにしに。
亮　一から出直すみたいな。

真澄は急に腹痛が起きて反射的にうずくまってしまう。
亮は真澄の異変に気が付かない。

亮　ハワイがいいかな。乾いてるからハワイは。同じ夏でも日本みたいにジメジメしてない。カラッとしてる。カラッと。なんかやろうかっていう気にもなるよ。日本語も通じるしね。
真澄　……。

亮　ダイビングもできるよ。
真澄　ああ……。
亮　いや意外と、ホントの話になるかも。
真澄　どうして。
亮　退職金が少し増えるかもしれなくて。ダメ元で言ってみたんだよ、工場長に。そしたら……。
真澄　ハワイ？
亮　そうそう。
真澄　そんなに安いの。
亮　ホントに。
真澄　ふーん。

真澄は髪をゴムでまとめ始める。

亮　行っていいんだろ？
真澄　え？
亮　海外。体調的に。旅行。
真澄　旅行なのそれ。
亮　え。
真澄　旅行に行くのハワイ。
亮　え、なに？
真澄　移住じゃなくて？
亮　ああ……いや、ま、そうなんだけどね。下見？　とりあえず。
真澄　……。
亮　防犯登録って。
真澄　なに。
亮　どこだろう。防犯登録の紙。
真澄　紙？
亮　自転車の。番号が書いてあるだろ。
真澄　どうして？
亮　警察にね。
真澄　警察？
亮　自転車。盗難届。
真澄　出すの？
亮　だって盗まれたんだから。
真澄　探してくれないよ。
亮　けど見つかったら連絡もらえるだろ？
真澄　まあ……
亮　捕まるかもしれないし。
真澄　捕まらないよ。
亮　どうして。
真澄　そんなヘマしないよ。
亮　盗んだ奴？
真澄　そう。
亮　……さっきからさ。

真澄　なに。
亮　なんか自転車泥棒にずいぶん詳しいよな。
真澄　え？
亮　真澄。
真澄　わたしが？
亮　「そんなヘマしない」とか「盗むって感覚じゃない」とか。
真澄　そう？
亮　やってた？　昔。
真澄　……想像すれば分かるでしょ。
亮　想像。
真澄　……ちょっとね。
亮　ちょっと？
真澄　若気の至りというか。
亮　へぇ。
真澄　汗流してくる。（と脱衣所へ）
亮　交番行って、スーパーで何か買ってくるよ。
真澄の声　そう。
亮　もう返ってるかもしれないしな。
真澄の声　え。
亮　自転車。

亮はＤＶＤを再生して見ている。

真澄　（顔を出して亮に）ドア閉めてくれる？　玄関……

亮は立ち上がり玄関のドアを閉め、戻って来ると今度は脱衣所へ。

真澄の声　え、なに。
亮の声　いや、いっしょに。
真澄の声　いっしょに？　いいよどうしてよ。
亮の声　水もったいないだろ。
真澄の声　鬱陶しいよ。
亮の声　鬱陶しくないって。
真澄の声　ていうか、水。無い。ほら。

ドアのブザー音。

真澄の声　誰か来た。
亮の声　いいよ。
真澄の声　出てよ。

半裸の亮が出てくるが、玄関ではなくポリタンクを持って浴室へ戻る。

真澄の声　戻ってこなくていいから！　出てよ。
亮の声　セールスだよ。

真澄の声　何の。
亮の声　さあ。
真澄の声　見たの？
亮の声　見た見た。

ドアのブザーは鳴り続いている。

2

翌日の午後。亮はヘッドフォンで音楽を聴きながら、掃除機をかけている。真澄は外出中だ。

ブザーが鳴るが、しばらく亮は気が付かない。気が付くと慌てて出てしまう。床に置かれたヘッドフォンからは音が漏れている。

亮の声　どうぞ。

亮とともに部屋へ入ってきたのは雄二だ。

雄二　いつから住んでるの、ここ。
亮　え、この春から。
雄二　その前は？
亮　練馬に。
雄二　練馬からのここ？　どうして。
亮　仕事で。
雄二　松富にもあるだろ。戻ってくればいいのに。
亮　まあ……。
雄二　（窓から外を見て）いいじゃんここ。見晴らし。全部見えるな。川、電車、山、田んぼ、空、雲……。けどあれだろ、この辺、水不足なんだろ？　ニュースで見たよ。夕方にしか水出ないって？
亮　ここはずっと出ないんだよ。
雄二　え。
亮　下の方は夕方になったらあれだけど、この辺は水道の水が届かないんだよ。高いところだから。場所が。それで給水車が来るんだ。
雄二　給水車。
亮　毎日。
雄二　あの川だって、ほとんど干上がってるじゃん。もっと大きな川なんだろ。
亮　そう。
雄二　普通じゃないね、この暑さは。
亮　今年はな。
雄二　一人で住んでるんじゃないんだろ。
亮　……ああ。
雄二　結婚してんの？　同棲？
亮　一応、籍だけ。年末に。
雄二　なんで教えないんだよ。
亮　誰にも言ってないんだ。松富の人間には。
雄二　え、なにそれ。秘密？
亮　秘密じゃないけど。
雄二　うん。
亮　なんとなく。
雄二　え、どういうこと。なにそれ。ていうか水くれる？　一杯。

亮は台所に立つ。

亮　面倒くさくなって。松富にもずっと帰ってないから。
雄二　東京に行ったきりな。盆や正月も？
亮　いや……実は正月だけは帰ってたんだけど。
雄二　おいおい、連絡しろよ。
亮　……。
雄二　なに、何かやらかしたの人殺しとか。
亮　してないよ。
雄二　だったら！
亮　まあそうなんだけど。
雄二　ま、俺も松富いないんだけどな。
亮　えっ。
雄二　だからこの町で営業してるんだよ。
亮　そうか。
雄二　で、どんな人、相手。
亮　……。
雄二　男か。
亮　女だよ。
雄二　どんな人だよ。写真は？
亮　（グラスを渡して）真澄。
雄二　え。
亮　真澄と結婚した。
雄二　真澄って真澄？
亮　そう。
雄二　どうして。
亮　どうしてって……まあ成り行きで。
雄二　いつ。
亮　去年の年末に。
雄二　いや、いつから。
亮　一昨年……か。東京で。
雄二　東京で？
亮　ばったり。
雄二　へぇ。
亮　そう……そうそう。

沈黙。

雄二　まあ、そうだな。お前ら二人が結婚したって松富の奴らが知れば、わあわあ言う奴もいるだろうな。
亮　隠すつもりはなかったんだけど別に。
雄二　それはめでたい。
亮　ありがとう。
雄二　式は？　披露宴。
亮　いや……別に。
雄二　けどやっとかないと、キレる奴も出てくるだろう。俺だって人伝えに今の話聞いたら、キレるよきっと。

亮　そうか。
雄二　そうだよ、狭いところなんだから松富。
亮　それはそうだけど。
雄二　どうせそのうち知られるんだから、ちゃんとしとかないと。
亮　カネもないしな。
雄二　カネ？
亮　そうそう。
雄二　そんなもんご祝儀で稼げばいいんだよ。
亮　そうかもしれないけど。
雄二　真澄だってしたいだろう。
亮　うんまあ……よく分からないけど。
雄二　したがってるって。絶対。
亮　（少し笑う）
雄二　まあけど、おめでとう！
亮　どうも。
雄二　（水を飲んで）温いな。
亮　え。
雄二　冷蔵庫壊れてんの。
亮　さっきもらってきたばっかだから。
雄二　給水車の？
亮　そう
雄二　酒あるの？
亮　え。
雄二　（床に転がる空き缶を指して）それ。冷えたやつ。
亮　仕事いいのか。
雄二　いいよもう。仕事どころじゃないだろ。こんなところで会うなんて。二十年近く？　ぶりに。
亮　二十年。
雄二　酒はそれ温いの飲んでるんじゃないだろ？

亮は冷蔵庫からビールを出す。

雄二　お前は。
亮　俺はいいよ。
雄二　仕事？
亮　じゃないけど。
雄二　今なにしてんの。
亮　え……工場で。
雄二　工場。
亮　クビになったところなんだけど。
雄二　切られた？
亮　うん。
雄二　だったらいいじゃん。飲めよ。することもないんだったら。

亮は少し躊躇するが自分の分も出す。

雄二　すみませんね、厚かましくて。ま、昔からだからな。
亮　そうだな。
雄二　……じゃあ結婚を祝して。
亮　どうも。
雄二　（乾杯をして）おめでとう。

二人、飲む。

雄二　いやいいね、昼間っから飲む酒は。……真澄は？　出かけてるの？
亮　うん。
雄二　俺がいるのを知ったらビビるだろうな。
亮　まあそりゃあな。
雄二　え子どもは？　ていうか、でき婚？

短い沈黙。

雄二　ん？
亮　子どもはいない。
雄二　……トモコ覚えてる？　トモコ。あいつなんか四人目だからな。
亮　結婚したのトモコ。
雄二　会社の同僚だって。俺たちの知らない奴。俺も会ったことない。あいつにも結婚式呼ばれてないしな。え、呼ばれた？
亮　呼ばれてないよ。今知った。
雄二　寂しいよな。俺たちあんなに仲良かったのにバラバラになって。ま、そういうもんかもしれないけど。メールの一つもよこさない。
亮　すまんな。
雄二　いやいいんだよ。ま、そういうもんだ。けどこんな小さな町じゃ、子ども産んでも大変か。……いやけど暑い！　見晴らしいいけどな。いいところ見つけたな。
亮　ああ。
雄二　高校生か、遊んでる。
亮　……。
雄二　ほらあれ。橋のちょっと手前。

亮は促されて外を見る。しかし目を凝らしても遊んでいる人の姿は見えない。

亮　え……
雄二　見えるだろ。
亮　いや……
雄二　お前、目悪かった。
亮　普通だと思うけど。
雄二　ほらあの。（と指を指す）
亮　うーん。
雄二　俺か、俺が良すぎるんだな。アフリカ人並みだからな。
亮　そうだっけ？

雄二　ていうかちゃんと覚えてんのか、俺のこと。
亮　覚えてるよ、雄二。
雄二　おお、そうそう。
亮　……。
雄二　えなに？
亮　事故にあったって……
雄二　俺？
亮　バイクの。
雄二　ああ……大変だった。軽とぶつかって、三か月かな、入院してた。よく知ってるな。
亮　……
雄二　死んだって聞いた？　もしかして。
亮　……。
雄二　俺、死んだって？
亮　うん……
雄二　だからか。なんかよそよそしいのは。お前。
亮　いや、まあびっくりして。
雄二　生きてる生きてる。
亮　うん。
雄二　ヨウスケだよ、勘違いして。噂は早い。誰から聞いた。
亮　真澄が。真澄の母さんから。電話で。
雄二　事故ってしばらく意識不明で。そうしたら誰かが勝手に死んだ死んだって言いまわったんだよ。多分ヨウスケあたりだと思ってるんだけど、俺が死んだって。みんなすぐ信じちゃって。バカだから。本当バカだよな。で、目が覚めて俺。死んでないから。けっこうヤバかったらしいんだけど後で聞いたら。けど生きてるって俺。生きてるから。けどまだ生きているって話より、もう死んだって話の方が、なんていうの……強いんだよな。なかなか前の話がなくならない。だから死んだことになって……それとも俺が嫌われてるのか……早く死ねばいいって、ハ。それに県立病院まで運ばれたから余計に。松富の病院じゃダメだったらしくって。俺が生きてても見かけられないし。いや、見舞いにはけっこう来たらしいんだけど、意識不明のときに。全身包帯だらけで、だいたい「意識不明の重体」って言ったら、もう死んだみたいに思うだろ？思うんだよあいつらは。バカだから。本当に。見舞いに来てくれた連中がそれを松富で言って、ああ死んだんだ雄二、みたいな。意識が戻る頃には、見舞いに来るやつは来た後だから。俺実際に会ったの、親だけだもん。それで退院してもリハビリがあるからって病院の近くに引っ越して。そう、それっきり俺も松富出たことになったんだよな。それに面倒くさくなって。誰かに会うたびに「あれ生きてたの」って言われるし、嫌だよそんなの。だからどうしてだか俺もさ、実家に荷物取りに帰るときもコソコソしちゃって。サングラスかけちゃったり。あ、これね。（と先ほどまでかけていたサングラスを見せる）
亮　死んだって聞いて、葬式に行こうって話をしたんだけど。なんか親御さんも松富から出たって聞いたから。どこで葬式するのか誰も知らなかった。
雄二　だって死んでないもん。
亮　そうか……
雄二　ま、俺もな、連絡してないんだから。すればいいんだけどな。しようもなかった。

真澄が現れる。

雄二　お邪魔してます。

真澄　え。
雄二　ＮＨＫです。テレビお使いですね。契約をね、していただきたいんですけどね。
真澄　……。
雄二　と思ったら、思ったっていうか、契約してくださいっていうのは本当だけど、ドアが開いたら亮だった。
亮　死んでなかった。
雄二　そうだよ。お前ら俺を殺しすぎなんだよ。
亮　……。
雄二　何度でも生き返って来るけどな、俺は。
真澄　事故にあったって。
雄二　そう。だけどほら。
真澄　うん。
雄二　結婚したんだって？　おめでとう。
真澄　え。
雄二　結婚。亮と。
真澄　ああ……。
雄二　こんなところにいたなんてな。
真澄　うん。
雄二　二人でな。
真澄　ごめん。
雄二　え。
真澄　連絡せずに。
雄二　それを言ってたんだよ。な。
亮　うん……。
雄二　ショックがでかいわ。二十年近く？　久しぶりに会ってこれだからな。
真澄　ＮＨＫ？
雄二　お前ら昨日居留守してたろ。何度もブザー押したのに。昨日は分かんなかったけどな、お前らだって。けどこの部屋、絶対に契約させてやるって燃えたねむしろ、俺は。
亮　トモコも結婚だって。
真澄　えそうなの。
亮　知ってた？
真澄　いや……誰と。
亮　俺たちの知らない人。（雄二に）会社の？
雄二　同僚だったか上司か。

沈黙。

雄二　てか、暑い！　エアコンなしでよくやるな。

雄二立ち上がり玄関へ行く。

雄二　ドア開けとけばいいんじゃね？　風が通って。

真澄は亮を見る。

亮　え。
雄二の声　これどうやって止めるのドア。
真澄　（視線だけで何か言おうとする）
亮　なに？
真澄　何でもない。

3

その後、三人は夕飯を食べに出かけた。
その日の晩。無人の部屋。

雄二の声　ああ、すみません。いいっすか……お邪魔します。

雄二が部屋へ入ってくる。

雄二　あ。タクシー代。
真澄　いいよ。
雄二　出す出す。
真澄　いいって。さっきも多く出したのに。
雄二　（財布をだして）えっと……
真澄　（亮に）ねえ。
亮　いいから、ほんとに。（とトイレへ消える）
雄二　だってお前ら、カネないんだろ。俺はほら保険金がもう……はい。（と金を渡す）
真澄　こんなにかかってないよ。
雄二　いいからいいから。
真澄　だってほら間違ってる。万札。
雄二　え。
真澄　混じってる。絶対違うからこれは。
雄二　じゃあ万札だけ。（と受け取る）
真澄　いやこれも。
雄二　いいってそれは、そのくらい。
真澄　いや本当に。
雄二　本当だってこっちも。
真澄　……。
雄二　いいんだって。そのくらい。
真澄　ありがとう……じゃあ。
雄二　はいはい。

亮がトイレでえずいているようだ。

雄二　大丈夫か。

真澄が様子を見に行く

真澄の声　大丈夫？

ほどなく真澄は部屋へ戻る。

雄二　酒強いんじゃなかったの。
真澄　いや……
雄二　けっこうなペースだったじゃん。
真澄　うん……めったに……めったにない。

雄二　真澄は。
真澄　わたし？　大丈夫。

真澄は玄関のドアを開けに行って戻ってくる。

真澄　酔ってるのは酔ってる。まあまあ。
雄二　鍛え方が違うからな、
真澄　鍛えてないよ。
雄二　十代から。
真澄　……風が通らない、かな。
雄二　いいよ、別に。昼ほど暑くない。
真澄　眠れる？
雄二　十分。
真澄　布団もなくて、うち。
雄二　どこでも寝れるから。
真澄　なにか飲む？
雄二　もうちょっと飲もうかな。
真澄　お酒？
雄二　いいっすか。
真澄　うん……
雄二　水飲むとあれだろ？　無くなっちゃうとマズいじゃん。
真澄　いいよまた明日もらうから。
雄二　水？　毎日？
真澄　だいたい。
雄二　大変だな。
真澄　今年はね、仕方がない。
雄二　歩いて？
真澄　自転車で。
雄二　ああ。
真澄　けど今日盗られたんだって。
雄二　自転車？
真澄　鍵かけないで置いてたら。
雄二　俺じゃないぞ。
真澄　誰も言ってないでしょ。
雄二　鍵かけないなんて、あげたみたいなもんじゃん。
真澄　（微笑んでいる）
雄二　鍵かけても盗られるのに。おれはこの前……先月、車上荒らし。
真澄　車？
雄二　ゴルフのパター。分かる？
真澄　分かんない。
雄二　テレビとかでさ、会社の社長とかが自分の部屋で練習してるじゃん。新入社員が社長室に入ったらやってるみたいな。
真澄　ああ。
雄二　持っていかれた。ちょっといいやつで。痛かったあれは。
真澄　わたしじゃないよ。

雄二　言ってないよ、そんなこと。
真澄　ゴルフとかするんだ。
雄二　仕事の付き合いで。亮は？
真澄　やんないやんない。
雄二　ゴルフ打って、サウナ入って、ビール飲んで、最高だよ。
真澄　完全におっさんだね。
雄二　そうだよおっさんですよ。もう四十越えてんだから。言っとくけど、お前も亮もだからな。
　俺が四十越えてるってことは。
真澄　わたしまだ若いもん。
雄二　年はいっしょに取るだろ。同級生俺たち。お前も立派なおばさんだよ。
真澄　やめて。
雄二　いつまでも高校生じゃないんだから。
真澄　誰も思ってないよ。
雄二　……亮もゴルフやんないかな。
真澄　運動嫌いだから。
雄二　けどなんかしないとヤバいだろ、体。
真澄　そうなんだけどね。
雄二　クラブなら知り合いの社長が古いのを誰かにあげるってさ、古いって言っても十分なんだけど、それもらってやれるけどな。
真澄　けど亮くんにゴルフってね。
雄二　ゴルフってな、社交の場だから、その社長もそうだけどいっしょに回って仲良くなって。
　仕事ないんだろ、あいついま。　次の仕事のチャンスになるかもだし。
真澄　ふーん。
雄二　運動神経そんなに悪くないだろ。
真澄　分かんない聞いてみないと。
雄二　せっかく久しぶりに会ってこれっきりになるのももったいないだろ。あいつ引きこもりがちだからな。川遊びもするか？　昔みたいに。
真澄　ええ？
雄二　キャンプして。トモコも呼ぶか。子どもも連れて来いって。
真澄　来るかな？
雄二　大丈夫。山には行かないから。
真澄　……。
雄二　そう……一度骨折ると同じところ折れやすくなるのか……よく分からないんだけど、バイクの事故でもやっぱりまた折れたんだよ。
真澄　そうなの？
雄二　見る？
真澄　（断って）いいよ、いい。
雄二　冗談だよ。
真澄　大丈夫なの？
雄二　全然。
真澄　そう……。
雄二　ちょ、ちょっ。
真澄　え。
雄二　ちょっと消して。電気。

部屋の明かりが消される。

雄二　（窓の外を指して）ほらやっぱりあそこ。
真澄　え。
雄二　花火してる。さっき通りがかったろ、タクシーで。
真澄　よく見えるね。遠い。
雄二　光ってるだろ。
真澄　かな。
雄二　高校生だよ、昼から遊んでる。さすがに花火はしないなこの年になると。やるか花火。
真澄　いや。
雄二　パチパチパチパチ。
真澄　え。
雄二　「いろとりどりパック」って書いてあるからいろんな花火が入ってんのかと思って、けどやってみるとだいたい似たり寄ったりなんだよな。けど花火をやるっていうより、花火で遊んでるみたいなもんだから、振り回したりして、ほとんどそのことに気が付かない。興奮するような花火って。
真澄　十代の頃はね。高校生とか。
雄二　お前、服焦がしただろ。
真澄　そうだっけ？
雄二　違う、俺が焦がしたんだ。なんか俺とお前と、花火を向け合って遊んでて。はじめはお前がやったんだぞ。
真澄　きっかけはトモコだよ。それ。
雄二　線香花火とかクソつまんないからまとめて火つけて、めちゃくちゃブーイングだった。
真澄　それは忘れた。
雄二　ぐちゃぐちゃだったんだよ、線香花火が束になって。一度に点けて。それでもあれはなんだろな、あんなに束にしてやったのに結局盛り下がるんだよ。

真澄は明かりをつけた。

雄二　帰れそうだな。
真澄　え。
雄二　車。そんなに酔ってない。
真澄　ダメだよ。
雄二　けど俺邪魔だろう？
真澄　ダメ。無理だって絶対。捕まるし、だいたいそこの坂下りられない。明かりがほとんどないから、絶対落ちるよ車ごと。
雄二　そうか。
真澄　やめて。今晩は泊まって。
雄二　もう落ちるのは嫌だな。
真澄　死んじゃうから絶対。
雄二　けど悪運強いよ俺。何度死にかけても戻ってくる。
真澄　そういうことじゃないから！　邪魔じゃないから。
雄二　すまんね。
真澄　いいよ別に。全然。ゆっくりして。
雄二　ありがとう。

真澄、トイレへ亮の様子を見に行く。

真澄の声　大丈夫？

やがて真澄は戻ってくる。

真澄　答えてくれない。
雄二　大丈夫か。
真澄　気持ち悪くてお腹も痛いって。
雄二　可哀そうに。
真澄　タバコ？
雄二　やめた。
真澄　やめたの。
雄二　居酒屋でも吸ってなかっただろ。
真澄　そういえば。
雄二　入院してるあいだに。長かったから。ちょうどよかったよ。
真澄　そう。
雄二　吸ってるの？
真澄　やめた。わたしも。
雄二　やめた方がいい。子どもだって作るんだろ？

沈黙。

雄二　止めりゃよかったって。
真澄　え。
雄二　東京行くの。お前が。なんとかして。
真澄　……どうして。
雄二　どうして？　え、どうしてって、それ聞く？
真澄　いや、だって止めるとか止めないの話じゃないから。知らなかったでしょ。
雄二　誰も何も言わないからな。
真澄　わざわざ言わないって。送別会してほしいわけじゃないんだから。大学に行くんだったらまだあれだけど。
雄二　亮も。
真澄　そう。東京でバッタリ会って、それで知ったんだもん。ずっと松富にいるんだって思い込んでた。
雄二　フッと消えるように。
真澄　え。
雄二　知らないうちにいなくなる。
真澄　止めようがないよ。
雄二　だから「なんとかして」って。
真澄　……。
雄二　そうそう。
真澄　え。
雄二　忘れるところだった。（カバンから書類を取り出して）これ。

真澄　なに。
雄二　契約。ＮＨＫの。
真澄　ＮＨＫ。
雄二　このために来たんだからここ。
真澄　うち見てないよ。
雄二　見てるか見てないかは関係ないんだよ。テレビがあれば契約しなくちゃいけないことになってるの。
真澄　アンテナつないでないから。
雄二　は。
真澄　アンテナ。

雄二はテレビの裏側を見る。

雄二　じゃあなにしてんの。
真澄　ＤＶＤ見てるだけ。
雄二　だけ？
真澄　そう。
雄二　嘘つけ。
真澄　嘘つかない。
雄二　（ＤＶＤの箱を拾って）「（ＤＶＤのタイトル）」。
真澄　読まなくていいから。（と箱を取り上げる）
雄二　太ってないじゃん。高校の頃から変わらない。
真澄　運動。
雄二　運動？　こんなに暑いのに？　わざわざ。
真澄　いいでしょ別に。
雄二　まあいいですけど。え、じゃあテレビは見ない？
真澄　見ませんね。

真澄が扇風機を動かしたりしてよそ見をしているすきに雄二が勝手に操作をしてダイエットＤＶＤがテレビから流れ始めた。

真澄　ちょっと！

慌てて真澄は雄二からテレビのリモコンを取り上げようとするができず、テレビ本体のスイッチを切ろうとしてそれを阻止しようとする雄二と揉みあいになり倒れこむ。

真澄　（笑いながら雄二の尻を叩いて）もうちょっと！
雄二　イタイイタイ。
真澄　バカ。

観念した真澄。雄二は映像に合わせて踊ってみる。

雄二　これからも。
真澄　え。
雄二　テレビ。

真澄　面白くないもん。ＮＨＫは見ないし。
雄二　お前もな、いい大人なんだから、ＮＨＫくらい見ろ。
真澄　関係ないでしょ、大人とＮＨＫと。
雄二　あるよ。高校生ならいいよ、あんな（窓の外を見て）遊んでる子たちに見ろとは言わない
　俺だって。民放のクソみたいなバラエティ番組見ときゃいいんだ。
真澄　雄二だって見たことないでしょ。ＮＨＫ。
雄二　見てるよ俺は。この前もＮスペで介護のことやってて、今って病院に長くいられないから
　さ、あちこち転々とするおじいちゃんとか、涙止まらなかったもん。
真澄　（笑って）介護って。
雄二　お前な、もう介護だぞ。すぐだぞすぐ。自分の親どうするんだよ。ボケたら大変なんだぞ。
真澄　そりゃそうだけど。まあその時はその時で。
雄二　松富ももう特養いっぱいなんだよ。
真澄　なに「トクヨウ」って。
雄二　……民放じゃやんない番組いっぱいあるんだから。
真澄　えーっ。だって見ないから。
雄二　そのうち見るかもしれないだろ。
真澄　そうしたら契約するよ。

　顔色の悪い亮が現れる。

真澄　契約しろって。しつこい。
亮　え。
真澄　ＮＨＫ。
雄二　これからはＮＨＫの時代なんだよ。
真澄　そんな頭のいい番組見ないって。（亮に）ね。

　亮はポリタンクを持ってまたトイレへ戻る。

雄二　紅白だって今年は半端ないんだぞ。
真澄　だから見ないって紅白とか。
雄二　ちょっと頼むよ。見てくれよＮＨＫ。この部屋だけなんだから。入ってないの。
真澄　他の部屋入ってるの。
雄二　そう。
真澄　お隣さんも？
雄二　そうだよ。震災のときだってＮＨＫのニュースが一番だったろ。
真澄　だから見てないって。
雄二　みんなＮＨＫの大切さを身に染みて感じたんだよ。みんなで支える公共放送、ＮＨＫ。税
　金みたいなもんだろ。
真澄　余計にヤダ。
雄二　（急に怒鳴って）いいから黙ってはんこ押せよ！

　沈黙。ダイエットＤＶＤの音楽と英語のガイドが響いている。

雄二　仕事なんだよ、俺の。
真澄　分かるけど。

雄二　今じゃなくていいから、また後で。
亮　（現れて）なに。
雄二　すまん、ちょっと興奮して。
亮　（真澄に）え。
真澄　飲みすぎたんだよ。
雄二　トイレいいか。あと顔洗っても。
亮　どうぞ。
雄二　お借りします。（とトイレへ）

沈黙。亮がテレビを消した。

亮　どうした。
真澄　あの人の癖。急に興奮するでしょ。
亮　何言われた。
真澄　いや別に。ＮＨＫの。
亮　うん？
真澄　契約。
亮　ああ。
真澄　大丈夫？
亮　まあ……油が悪かった。あの居酒屋。
真澄　食べ物？
亮　うん……ここで寝るって？　ここしかないけど。
真澄　どこでも寝れるんだって。
亮　暑いだろうな。俺たちはいいけど。
真澄　こんなに暑くなるとは思わなかった。
亮　今年？
真澄　この部屋。
亮　ドア開けとく？
真澄　開けてる。
亮　通らないな、風。
真澄　うん。
亮　（戻ってきて）エアコン買うか。
真澄　エアコン？
亮　退職金で。
真澄　エアコン。
亮　冷暖房どっちもついてるやつ。
真澄　ハワイに行くんでしょ。
亮　ハワイにも行くけど。
真澄　気が大きくなってる。
亮　そうかな。
真澄　だいたい引っ越すときにまた外して持っていかなくちゃいけないでしょ。
亮　買い取ってもらったら？
真澄　誰に。
亮　大家さん。
真澄　買わないよ。

亮　大家さんからすれば都合がいいだろ？
真澄　いらないって言われたらおしまいだよ。
亮　言うかな。
真澄　言うよ、あの人。
亮　だったら先に相談すれば？　だいたいつけていいのかも聞かないと。
真澄　え本気？
亮　いや、買うならね。
真澄　買うならでしょ。
亮　そう。
真澄　買うの？
亮　え、どうする。
真澄　いいよ。
亮　けど冬もあるだろ。
真澄　エアコンはさ、電気代が高くつくから。
亮　そうか……（戻ってきた雄二に）大丈夫か。
雄二　お前の方がだろ。
亮　出すもん出したから。

沈黙。

亮　ノルマ？
雄二　え。
亮　契約。
雄二　ノルマって言うか歩合制。
亮　一つの契約でいくらみたいな。
雄二　そう……こんな暑い時にな、誰も契約なんかしたくないよ、ＮＨＫとか。
亮　……。
雄二　お前も仕事ないんだろ、工場クビになって。するか？　ＮＨＫの訪問。けど押しが弱いからな。どうすんの家のやりくり。
亮　まあなんとか。
真澄　当分はわたしのパートを増やすしか。
雄二　こんなところに仕事あんの。工場以外。
真澄　パートならね。
雄二　けど松富にも帰らないんだろ。
真澄　たぶん……（と亮の顔を見る）。
亮　そうだな。

亮は水を飲みに台所へ。

雄二　水飲んどかないと。脱水になるから。
亮　なんであんなに飲んだんだろ。
雄二　俺たちに合わせようとするからだ。意地はって。
亮　意地ははってない。
雄二　お前ゴルフやるか。
亮　ゴルフ。

雄二　俺いまやってるんだ。運動にもなるしいいぞ。
亮　ゴルフか……。
雄二　クラブも譲ってもらえるんだ。ちょうど俺の知り合いの社長がな、いらないやつくれるって。
亮　やったことないからな。
雄二　誰だってはじめはそうだよ。
亮　まあな。
雄二　やろうよ。
亮　うん……
雄二　いいよゴルフ。

風鈴が鳴りはじめる。

雄二　風が通ってきた。
亮　寝れるか？　こんなに暑くて部屋。
雄二　……ほら川。
真澄　え。
雄二　花火が終わった。あんなに大量に買いこんでも、何人かでやってたらすぐに無くなってしまう。ほら。

真澄も窓から外を見る。

真澄　終わったのかどうかも分からない。真っ暗で。
雄二　バケツの用意もないから燃えカスはその辺に散らばって、花火が入っていたビニルは川に流れて。そう、けど真っ暗だから、見えないしそんなこと気にしちゃいない。テントに戻って、
真澄　テント？
雄二　そうテント。
真澄　テントも見えるの？
雄二　ほらあそこ。
真澄　……。
雄二　やりまくるんだろうな。
真澄　え。
雄二　男二人女二人の高校生たちが、昼間から川で遊んでバーベキューして、酒飲んで、夜は花火でって。それでおやすみってなるわけがない。元気がありあまってるからな、あいつら。だろ？
真澄　帰るでしょ。親だっているんだから。
雄二　いやいや。
真澄　え。
雄二　そんなまさか、お前が。
真澄　わたし？

沈黙。

雄二　男たちはやる気満々。女たちだってもう分かってる。
真澄　（戸惑いつつ笑って）ええっ？

雄二　一応男女別れてテントに入る。けど男の一人は別れ際に視線を送って女の一人がそれを受け取る。しばらくはじっと横になって、相方が寝静まるのを待つ。もういいかとテントを出ようとしたら相方がどうしたっていうから、なんだ寝てなかったのかよと思って、ちょっとションベンって。相方は何も言わず、分かってんのか分かってないのか、まあそんなことはどうでもいい。相方もう起きてるの分かっているのに、なぜだか物音立てないようにテントを出る。女のテントへ歩き出そうとしたら、な、後ろにいるんだ。女はもう。後ろに立っている。

真澄　……。

雄二　ほら、歩いていくのが見えるだろ。

真澄　見えないよ。

雄二　月明かりに照らされて。二人が茂みに入っていく。

真澄　雄二。

雄二　ほら。

真澄　雄二。

雄二　ずっとずっと。花火の時にふった蚊よけのスプレーが効かなくなるまで。

真澄　雄二！

雄二　え。

真澄　（亮を見る）

亮　え、なに。

雄二　（亮に）そうだろ？

亮　なにが。

雄二　茂みに入っていくの見てただろ？

亮　……。

雄二　テントの中から、虫よけのメッシュ越しに白く黒く消えていく俺たち。若気の至りだ。十代だから……けどその仕返しは受けたからな。

亮　仕返し？

雄二　そうだろ？

亮　なんだよ仕返しって。俺はなにもしてない。

雄二　そうか。

亮　そうだよ。

雄二　じゃあ俺の思い込みだな。

亮　なんの思い込みだよ。

雄二　（ニヤニヤして）うん？　うん……

真澄　（雄二に）何しに来たの。

雄二　なにが。

真澄　ここに。わたしたちを探してたの？　知ってたんでしょ、わたしと亮くんが結婚したって、してるって。東京出たけど松富には帰らないでここに、ここに住んでるって。

雄二　いやいや全然。

真澄　……。

雄二　ＮＨＫの契約を取ってるんだよ俺は。この町は未契約の世帯が多いから、ここひと月くらいずっと回ってるんだよ。高台に建つボロいアパートを見つけて一部屋ずつ。最後が二階の奥にあるこの部屋だった。たまたま。表札を見ても気が付かなかった。昨日が居留守なのは分かってたけど、今日またブザーを押してやっぱり出なくて。掃除機の音は聞こえてたから、どうしようかなって。まあけどまた来るかと思って引き返そうとしたら、亮が出てきたんじゃないか。な。

亮　おう……

雄二　いいか。亮が。お前らが出てきたんだ先に。ドアから顔を覗かせて。居留守も使わず。
真澄　……。
雄二　そうだろう、お前らが出てきたんだ。先に。
真澄　信じられない。
亮　なにが？
雄二　信じるもなにも……そう言われてもな。

雄二は仰向けになる。

雄二　明日は朝一で帰るから。仕事だし。勝手に出ていくけどいいか。
真澄　うん。
雄二　……見えないか。
真澄　なにが。
雄二　あの川。干からびた川。
真澄　見えるよ。
雄二　川岸にテントがあるだろ。
真澄　……。
雄二　見えないのかそれは。
真澄　見えない。
雄二　山は？　山。

沈黙。

雄二　じゃあ仕方がない。見えないものは、な。
真澄　謝ればいいの？
雄二　え。
真澄　謝ってほしいの？
亮　真澄。
雄二　何言ってんだ。俺はな……俺は……契約してくれ。
真澄　……。
雄二　ＮＨＫ。そのうち見るんだから。お前らも……だろ？

雄二は寝る。真澄と亮はじっと雄二を見ている。
部屋の明かりが一瞬明滅する。
亮は雄二に近づきそして跨り、首を絞めようとする。

真澄　亮くん……
亮　（潜めた声で）次の日。川の次は山だって、雄二が言い出したんだ。
真澄　そう。山行くぞって。
亮　山を歩いていて、あいつが道の脇に何かを見つけた。それを拾うからって、斜面になってたから俺と手をつないで……拾おうとして……足を滑らせた。俺は手を握っていたんだけど、けどダメだった。スルッと抜けてしまって。あいつは林の斜面を転がって下まで、テントを張ったところまで落ちて行った。
真澄　（動揺したかのように）大丈夫、生きてる？
亮　俺たちが駆け付けた時には、血まみれで意識もなかった。真澄とトモコが誰かを呼びに行っ

て。
真澄　亮くんは雄二を運ぼうとした。
亮　けど雄二、血まみれで、俺は触るのが怖かった。ずっと立ったままで。ボーっと。けど死んじゃうと思ったから、そう思うと怖いなんて言ってられないって、だから雄二を背負おうとしたんだ。近寄って……肩を叩いて、

亮は雄二の肩をたたく。雄二の目が開いた。

亮　そうしたら少し意識が戻って。
真澄　え。
亮　少し意識が戻って。雄二。けどその時、腕の骨が飛び出ているのを見た。雄二の折れた骨。見ちゃった。皮膚を突き破って真っ白い腕の。血がついてたけど真っ白な。もう無理だった。ビビったんだ、俺は。ビビッてもう無理だって、それで逃げた。
真澄　……仕方ないよそれは。誰でも。怖いよ。
亮　死んでたかもしれない。
真澄　……けど助かった。そうでしょ、だからわたしたちの目の前にいる。
亮　雄二が？
真澄　寝てる。
亮　……。
真澄　そのこと言われた？　雄二に。
亮　覚えてなかった。何も。林の斜面を転がってるのが最後、次は病院だったって。
真澄　気にすることないよ。だったら。
亮　二十年。
真澄　え。
亮　二十年以上も経ったのに。

二人は手をつなぎ部屋を出ていく。
雄二の目はすでに閉じられている。

4

一週間ほど後のこと。午後。
無人の部屋。しばらくして亮が水の入ったポリタンクを持って部屋へ戻ってくる。

亮　まだか……。

ポリタンクを台所へ置くと、亮は取ってきた二通の郵便物を見た。一通目のはがきは撤去された自転車についての知らせだった。それを見た亮は携帯電話を取り出してダイヤルする。

亮　もしもし……えっと「撤去された自転車の引き取りについて」っていうはがきをもらったんですけど、

亮は窓際へ行き、扇風機のスイッチを足で押し、窓から外を見る。眼下の川は先日よりもさらに川幅が狭くなっているように見える。

亮　これ、撤去ってね、あの盗まれたんですけど……そう先週スーパーで……あ、いや出してないですけど番号分からなかったんで防犯登録の……これ……これ、このはがきって防犯登録の番号から住所が分かったんですよね……はい……はい……じゃあその番号って教えてもらえませんか。じゃないと警察に出せないですから……そう、それも探したんですけど……ああ……けど番号ってどうやって……あはい、フナダリョウです。四十八年の、昭和四十八年の、十二月三日。はい。０８０、７９２３、xxxx。フナダです……はいじゃあよろしくお願いします

亮は電話を終えると防犯登録の控えを探し始める。

真澄の声　ただいま。
亮　……。
真澄　やっぱり。
亮　え。
真澄　後ろの方にいたんだよわたし。
亮　そう？
真澄　呼んだのに。
亮　気が付かなかった。
真澄　わざと？
亮　どうして。
真澄　だって何度呼んでも気が付かないから。
亮　きついんだって、本当に。水でいっぱいのポリタンク２つ両手に持って、坂を上がるのが。
　それでじゃない？　聞こえなかったもん、蝉もうるさいし。
真澄　ならいいけど。（と扇風機の前に座る）暑い！
亮　撤去されたんだよ。
真澄　なにが。
亮　自転車。はがきが来た。
真澄　良かったじゃん見つかって。
亮　けどお金払わないと。
真澄　引き取るのに？

亮　３５００円。
真澄　盗まれたのに？
亮　だから電話したの、いま。そしたら盗難届を出せって。
真澄　そしたらタダになるの。
亮　そう。
真澄　（もう一通の封筒を見て）ＮＨＫ。「ご契約いただいたみなさまへ」
亮　シール入ってる？
真澄　シール？
亮　受信料払ってると玄関先に貼るシール。
真澄　（封筒を開けて）……ないね。
亮　ないの？
真澄　最近見ないよ。
亮　え、そう？
真澄　ほら。

真澄は封筒を亮に渡す。

真澄　わたしは見ないよＮＨＫ。
亮　今月からだって引き落とし。
真澄　そう。
亮　真澄の口座。
真澄　え、わたしの？
亮　「軍師官兵衛」

亮は探すのをやめる。真澄の隣に座って扇風機の風にあたる。

真澄　探さないと。
亮　うん。
真澄　雄二くんから連絡あった？
亮　いや。あれからまったく。
真澄　……放っておいたらそのうち処分になるんでしょ。
亮　ひと月。
真澄　３５００円は高いけど、買い直すよりマシ。
亮　そりゃそうだ。
真澄　わたしもきついもん。こんなに暑いのに歩くの。
亮　うん。

沈黙。

真澄　探したら？
亮　もうちょっと涼しくなったら。
真澄　ならないって。秋まで。

二人は空を見た。

亮　ゴルフ。
真澄　え。
亮　やった方がいい？
真澄　するの。
亮　え。
真澄　ゴルフ。したいの。
亮　したくはないね。
真澄　だったら。
亮　そうなんだけど。
真澄　ゴルフとかって……
亮　ん？
真澄　遠いよ。亮くんからゴルフは。
亮　そうだよな。
真澄　ゴルフ始める前に仕事見つけなきゃでしょ。
亮　そうそう。
真澄　ゴルフ……ゴルフってなに。
亮　さあ……けどハワイにもゴルフあるらしいよ。
真澄　そりゃあるでしょうよ。
亮　なんでもあるんだなハワイっていうのは。

沈黙。

真澄　（扇風機のカバーを指して）ぼんやりする。
亮　え。
真澄　これ。会社の名前。
亮　見えないの？
真澄　（首を後ろに引いて）こうしたら、見えるけど。
亮　老眼か。
真澄　遠いところもぼんやり。
亮　なにそれ病気？
真澄　ちょっとひどくなってるかな。サングラスかけないで外出たしな。紫外線で目が。
亮　なに。
真澄　焼けちゃった。
亮　太陽見た。
真澄　見てないよ。見てないけど目に良くないの、紫外線が。
亮　これ見えない。
真澄　うーん、ぼんやり。

沈黙。

真澄　道端にカラスが死んでたでしょ。見た？
亮　どこ？
真澄　郵便局のポストのところ。
亮　俺はそれどころじゃないから。ポリタンクで。
真澄　死んでたのよ、目が合っちゃって。

亮　ガン見するからだろ。
真澄　だからはじめ分からなくて、ぼんやりしてるから。なんか黒い物体が、え、なんだろうってちょっと目を凝らして。あ、カラスかって思ったら目が合った。
亮　こんだけ暑けりゃ死ぬよ。
真澄　うわっと思って前を見たら亮くんがいたの。
亮　俺？　カラスからの？
真澄　離れてたけど。
亮　けどぼんやりしてるんだろ？
真澄　そう、だから蜃気楼かと思った。真夏の一本道。人も車もない一本道の向こうに亮くんは立っていた。
亮　歩いてたよ俺はずっと。
真澄　アスファルトから湯気のようにたちあがる、あれはなに？
亮　熱気だろ。もやもやっとしている。
真澄　ゆらめきながら立ち上がる熱気の中にあなたがいたの。蜃気楼かと思った。そしてあなたがわたしに気がついて歩き出すんだけど、わたしに向かっているのか、わたしから去っていくのかが分からない。ただゆらゆらと、蜃気楼が、熱気が、夏のあなたが揺れている。
亮　どっち
真澄　え。
亮　結局、離れていったの、向かっていったの、俺は。
真澄　ふふん。
亮　お気の毒に。
真澄　なにが。
亮　熱中症だよそれ。水飲んだ？
真澄　飲んでるよ。
亮　あんまり飲まないからな水。

亮は立ち上がり台所へ。

亮　じゃああの川もぼんやり。
真澄　え。
亮　あの川。
真澄　遠くも見えない。近くも見えない。ぼんやりして。
亮　病院行ったら？
真澄　全部が何もかも、蜃気楼かと思った。なんか全部。じゃなかった、だったら良かったのに、とかむしろ。
亮　バテてるんだよ。（とグラスを渡す）
真澄　ありがとう。
亮　（窓の外を見て）川しか見えない。誰かいるのか俺には見えない。
真澄　早く雨降るといいのに。

ドアのブザーがなる。固まる二人。
やがて亮が玄関へ行き、宅急便の箱をもって戻る。

亮　アマゾン。
真澄　ああ。

亮　なにこれ。
真澄　……ＤＶＤ。
亮　またエロいの？
真澄　エロくない。また別の。
亮　別の？　別のってどういうこと？　もうあるじゃんそれ。
真澄　種類が違うから。
亮　種類って……

真澄はテレビとＤＶＤのスイッチを入れ踊りはじめる。

亮　……バイクで死んだって聞いたとき、雄二が。なあ、俺はどこかでホッとしたんだ。あいつには悪いけど。
真澄　……。
亮　区切りがついたって。山から落ちた時もそう。けどあいつが生きてるって聞いて、それはそれで別の意味でホッとして。けどまたあいつに何かあったら俺は願うんだろうと思う。死んでくれって。頼む死んでくれって。そうじゃないと先に進めないんじゃないかって気がして……あいつの屍を越えて。
真澄　シカバネ？
亮　死体。死んだ死体。
真澄　殺してないでしょ。
亮　殺したんだよ俺は。あいつだけじゃない、いつも誰かを殺して死んだことにして、その屍を踏みつけてるんじゃないかって。先に進むために。カラスの死体を横目に誰かの死体を。
真澄　何の話？
亮　なあ、俺ってひどいんだよ。けっこうある。高校のときも。
真澄　なにが。
亮　学校へ行くとき。電車で。「松富公園前」ってあっただろ。
真澄　うん。
亮　その駅に電車が止まるんだ。それでしばらく待つだろ？　向こうから来る電車とすれ違うのを……待っている時にしばらく……俺は決まって母親をね、自分の。殺したくなる。そういう衝動がフッと湧くんだ。仲が悪いわけでもない。松富公園に嫌な思い出があるわけでもない。けど、どうしてだか、そのときその場所にいるときだけ、ふと母親を殺したいって思っちゃうんだ。
真澄　……。
亮　電車が動き始めれば、すぐに消えてなくなる。家に帰って母さんと会っても何も思わない。これっぽっちも。ほんとに。けどその時だけ。あの駅で、電車がすれ違い待ちをしてるときだけ。
真澄　そう……
亮　俺、おかしいんだろうか、頭が。異常かな。
真澄　別に……だってわたしもよく言うもん。あんな奴死ねばいいって。
亮　それは冗談だろ。
真澄　そうだけど。何回も何回も繰り返してると本当にそう思ってるのかなって、分からなくなるときがある。
亮　暑いからかな。
真澄　そうだよきっと。

真澄はずっと踊っている。

真澄　いいですよって。
亮　なにが。
真澄　病院。検査の結果。もう問題ないから、子供もまたできるって。
亮　そう……じゃあ激しい運動やめたら？
真澄　できたらね。

沈黙。

真澄　ドア開けといて。暑いから。
亮　また誰か来るよ。
真澄　いいから、別に。

亮は玄関へ行った。
ドアを開けたせいか部屋には風が通り始めた。
風鈴の音も鳴りはじめる。
真澄はふと踊るのをやめて窓から外を、町を流れる川を見た。
いつもの川がそこにはある。
ほどなく真澄は踊りに戻る。テレビのボリュームを少し上げた。

【了】